

医療史跡

鍋島直正と笠原白翁

幕末の第10代佐賀藩主 鍋島直正（1814～1871年）は、質素儉約を旨とした藩財政の緊縮策を推進し、佐賀藩の財政改革や教育改革を行った。1834年に、医療を施す病院であると同時に、医師を養成する専門教育機関でもあった“医学館”を開設した。1858年に、医学館は好生館と名を変えるが、これが現在の“（地独）佐賀県医療センター好生館”の前身である。

鍋島直正は、佐賀藩医の榎林宋建（1802～1852年）に牛痘を入手するように命じ、宋建は苦心の末1849（嘉永2）年オランダ人の医師オットー・モーニッケ（Otto G.J. Mohnicke：1814～1887年）から痘苗を入手した。これが、牛痘接種による日本最初の成功例となる¹⁾。

佐賀県立病院好生館の中庭にある“閑叟公と種痘の像”で、左側に立っているのが、鍋島直正公で、その息子の淳一郎に種痘を行っているのが侍医の大石良英である。閑叟は直正の号であり、淳一郎は後の第11代藩主直大である（写真1）。

笠原白翁（本名：良策 1809～1880年）は、天然痘を予防できる種痘を知り、福井越前藩の名君の誉れ高い松平春嶽に、鎖国下の日本にあって痘苗の輸入を嘆願した。その嘆願書の大意は、「飢餓、戦争と疫病は国家の三大難事であり、中でも疫病は最も国力を弱めるものである。」とあり、人命ばかりでなく、国家的な損失と白翁が述べた。白翁は号で、牛痘のラテン語ハクシーネの漢訳“白神痘”からとったという。1849（嘉永2）年に、長崎に痘苗を入手しに行く途中で訪れた京都の日野鼎哉（1797～1850年）宅で病苗を入手し、種痘に成功し、まず京都での普及を果たした。白翁は緒方洪庵（1810～1863年）ら様々な人に痘苗を分け、日本全土に種痘が広まるきっかけとなった²⁾。白翁は、同年11月19日（陰暦）に種痘を施した幼児を伴い福井に向かった。当時の種痘は、人から人へ種継ぎをして



写真1 閑叟公と種痘の像（（地独）佐賀県医療センター好生館中庭）



写真2 笠原白翁の墓所（福井県福井市大安禅寺墓地）

いく以外に確実な方法はなかったが、太陽暦では1月上旬に当たるこの時期、滋賀県と福井県との国境の栃ノ木峠は深雪で覆われ、幼児を連れての峠越えは正に決死行であった³⁾。

当初、自宅近くの“浜町”で種痘が実施され、その後1851（嘉永4）年には公立の種痘所“除痘館”が城下に開設され、その後は急速な普及をみた。白翁がもたらした種痘はその後、鯖江藩、大野藩、そして加賀藩金沢、富山、敦賀、勝山、丸岡、金津、三国などへも福井から分苗され、多くの人命を救った（写真2）。

■ 参考資料 ■

- 1) 福岡博、佐賀の幕末維新 八賢伝、出門堂（2005）
- 2) 諸澄邦彦、緒方洪庵と適塾、*Isotope News*, No.672, 18（2010）
- 3) 吉村昭、雪の花、新潮文庫（1988）

〔日本診療放射線技師会 諸澄邦彦〕